

長野県立大学大学院

ソーシャル・イノベーション研究科

2023 年度 院生紹介 BOOK



長野県立大学
THE UNIVERSITY OF NAGANO

より良い社会をつくる
イノベーターを長野から

SOCIAL INNOVATION

MESSAGE

長野県立大学大学院ソーシャル・イノベーター研究科は、社会を変革するイノベーターを育成することを目指して2022年4月に開設されました。

本冊子は、2023年度に入学した2期生12名の紹介と、2023年度に修了する14名のリサーチペーパーについて紹介することを目的として作成しています。紹介されている院生のプロフィールや、リサーチペーパーの内容を見ていただくと、いかに多様な背景や専門性をもつ大学院生たちが在籍・修了していくかがわかります。

本学関係者だけでなく、多くの方に本研究科の大学院生について知っていただくことで、本研究科に在籍・修了した学生たちが、各地でイノベーションを起こしていく動きを、多くの方とコラボレーションしながら生み出していくことを願っています。

CONTENTS

2023年度入学生紹介

岩下 宏文 さん／大石 達郎 さん／九里 美綺 さん	04
神津 喜英 さん／清水 由佳 さん／張 素梅 さん	
寺田 敦 さん／中嶋 信之 さん／橋本 圭太 さん	05
林 織史 さん／古畑 直樹 さん／山岸 裕始 さん	

2023年度修了生紹介

リサーチペーパー タイトル一覧	06
赤堀 久美子 さん／川向 思季 さん	07
工藤 創 さん／江津 篤 さん	08
小林 憲一 さん／三枝 大祐 さん	09
塩入 美雪 さん／関 賢一 さん	10
中尾 大介 さん／中山 望 さん	11
沼井 大志 さん／拜野 昌彦 さん	12
堀 和基 さん／堀江 信彦 さん	13

教員からのメッセージ	14
------------	----

2023年度入学 院生紹介



岩下 宏文 さん
Hirofumi Iwashita

長野市在住。昭和・平成・令和の働き方を経験してきた地方銀行員。企業再生支援、支店経営等に從事してきました。5年前より関連会社の（一財）長野経済研究所に出向し、人事制度コンサルに従事中。大学院では、世の中の「働かないオジサン問題」を解決すべく、シニアホワイトカラーの学び直しやマインドセットをテーマに、多様なメンバーから多くの事を学んでいます。読書記録をInstagramにて配信中。ご関心がある方はh.iwasanで検索下さい。



九里 美綺 さん
Miki Kunori

2001年松本市生まれ。合同会社キキ／ミリグラム株式会社。長野県立大学に入学を機に、地域での活動に興味をもち(公務員を受けようと思っていたの下心もあり...)、長野県内をぐるぐる。学部3年次に仲間と合同会社キキを設立。学生向けのシェアハウスの運営や地域企業へのインターンシップのコーディネートなどを行う。SI研究科では地域のマイクロホテルを研究中で、次はホテルを作るべく、拠点を南信に移す予定。



清水 由佳 さん
Yuka Shimizu

2001年長野市役所入庁。2014年13年間の勤務を経て退職。同年、からだサポートセンターゆあなす代表。2016年NPO法人カシオペア（現在NPO法人utagu）祥雲高等学院明蓬館SNEC長野（通信制高校サポート校）を設立、副理事長・センター長となる。2019年同法人理事長就任。同年、障害者就労支援事業所開設。施設長。2020年2月株式会社CONNECT設立。保健師・看護師・健康運動指導士。



大石 達郎 さん
Tatsuro Oishi

長野県岡谷市出身。中学高校バスケ部、大学では合唱団。長野県職員13年目で、松本の道路建設や管理→中小企業金融→県立大学オープニングスタッフ→文化財や生涯学習…と業務を歴任。県立大学職員時代に長野ITコラボレーションプラットフォーム(NICOLLAP)の立ち上げに関わった経験から大学院に入学。小説家を目指して文学界新人賞に応募するも一次選考で余裕の敗退。大学院で忙しくなり最近では休筆中だが、とりあえずデビューが夢。



神津 喜英 さん
Yoshihide Kozu

1986年長野市出身、御幣川少年野球～長野吉田高校野球班（サヨナラヒットの被弾経験多数）。東京の大学を卒業後「土日休み」に惹かれて数字の銀行に就職。リーマンショック前の大量採用の恩恵を受ける。長野県内外で法人営業を経験。法人営業時代に再エネ案件を多く経験したことから、2022年～総務部にてGX（グリーンTRANSフォーメーション）を担当。「温室効果ガス排出量の削減管理」や「環境保全活動の推進」をする仕事で日々奮闘。8階の食堂までは階段を使うことが自己ノルマ。



張 素梅 さん
Sumei Zhang

1983年生まれ、中国出身で小学校の教員としてスタートし、2006年来日。その後工場勤務、通訳、貿易事務の経験を経て、2015年にPOLA株式会社へ入社、2017年に独立してPOLAエステインショップを経営している。そして、個人で中国語教室も運営している。介護福祉士の主人を支え、高齢社会への貢献を目指し、2023年3月介護福祉専門学校から卒業、将来的には「高齢者」と「美容」に焦点を当てて課題を研究して行く予定です。



寺田 敦 さん
Atsushi Terada

1996年長野市生まれ。長野市役所勤務。県外の大学を卒業後、都会暮らしへに疲れたことや生まれた時から世話になっている長野市で働きたいと思ったことから、地元の長野市役所に就職。入庁初年度で台風19号による災害を経験し、公共施設の災害復旧などに携わりました。現在は、長野市内における自転車の利用促進に関する業務を携わっています。大学院では、行き詰まっている若手の行政職員に着目した事業計画を考えています。



橋本 圭太 さん
Keita Hashimoto

1994年大阪府堺市出身。家具職人／伊那市地域おこし協力隊／二級建築士。ハウスメーカーで新築100件以上の現場管理経験、家具デザイン会社にて公共建築物の家具制作を経て、伊那市で家具職人として独立。同時に協力隊として伊那市の森林経営計画の補助、森林とものづくりを掛け合わせた企画を立ち上げ活動しています。SI研究科では森林課題をテーマとして事業計画作成に取り組んでいます。趣味は将棋と碁石探索。



古畑 直樹 さん
Naoki Furuhashi

1989年生まれ、塩尻市出身。大学卒業後、塩尻市社会福祉協議会に就職。社会福祉士で精神保健福祉士。権利擁護事業や障がい者の就労支援などを経て、現在は認知症や障がい等により生きづらさを抱えている方への相談支援を中心に行っている。住民から寄せられる声を地域の課題として捉え、分野の垣根を越えて、人と人、人と場所を繋ぎながら、10年後も住みやすい福祉のまちづくりに取り組んでいる。



中嶋 信之 さん
Nobuyu Nakajima

木曽郡南木曽町生まれ、安曇野市（旧豊科町）育ち。安曇野市役所在職。高校生活を応援団に捧げ、大学では登山とバイトに明け暮れる。まちづくりや空間デザインに関心を持ち、都市計画系コンサルタント会社に就職。東京、大阪、福岡を転々としながらブラックな働き方を経験。30歳を機にUターン、業務で携わったガーデニングに沼り自宅の庭で約30種・120株の草花を育てる。現在は地域交通の再編とDX化を担当しモビリティ改革を企てている。



林 織史 さん
Orito Hayashi

関西生まれ関東育ち、欧州在住歴10年以上。引越し20回を経て信州・松本に落ち着く。青春時代に数学者を目指したものの挫折し、チーズ職人の道に進み今に至る。並行して日仏英蘭語の技術通訳を務め、現在はフランス系乳業メーカーにて勤務。長野県の魅力ある発酵食品を国際的な文化遺産として発展させたいとの思いからSI研究科にて新規事業を構想中。



山岸 裕始 さん
Hiroshi Yamagishi

1980年長野県小布施町生まれ。農家の長男として生まれ、小さな頃から「農家を継ぐんだ」と育てられる。農家になる前に好きなことをしようと、26歳で飲食店を起業。事業を通じて多くの仲間と出会い、その経験を生かして地域社会への貢献を目指しました。小布施町でまちづくり団体を立ち上げ、30歳で町議会議員に当選。2期8年間にわたり地域のために尽力しました。政治家としてのキャリアを終えた後も、地域への貢献を続けるべく、保育事業を始めるなど、さまざまな地域貢献活動に取り組んでいます。

2022年 4月開設の長野県立大学大学院「ソーシャル・イノベーション研究科」は、今年度、初めての修了生を送り出すこととなりました。
修了生・14名によるリサーチペーパーをぜひご覧ください。

01	赤堀 久美子	ソーシャルイノベーション創出につながる企業の社会貢献活動のためのフレームワーク構築 ～リコーの社会貢献活動の事例を通じて～
02	川向 思季	大学生のマイプロジェクトを支える教育エコシステム構築における課題分析と提案 ～長野県内のマイプロジェクトに取り組む大学生を対象としたインタビューからの分析～
03	工藤 創	地方自治体のパラダイムシフトと組織変革の実現に関する考察
04	江津 篤	看護師の離職予防のための看護管理者に求められるマネジメント ～職員満足度調査からの考察～
05	小林 憲一	地域工務店におけるファミリービジネス事業承継プロセスの研究 ～修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) を用いた質的分析から～
06	三枝 大祐	シビック・イノベーション拠点スナバが生み出すインパクトの最大化に向けての考察 ～中間支援組織の視点から分析する地域イノベーション創出の成功要因と今後の可能性～
07	塩入 美雪	母親のウェルビーイング向上のための大学生向け SRHR 教育プログラムの開発 ～母親へのライフストーリー・インタビューの分析結果をふまえて～
08	関 賢一	アスレティックトレーナーの社会的地位向上に関する研究 ～新たな価値創造による活動領域の拡大をつうじて～
09	中尾 大介	善光寺門前町(旧善光寺町)における地域と老舗の課題と未来 ～フィールドワークによる課題整理と観光まちづくりの可能性～
10	中山 望	出産・育児により離職した女性のリスクリングに関する研究からの事業提案
11	沼井 大志	組織における個人の関係性のなかでクリエイティビティを発揮させる対話を用いた方法論の提案
12	拜野 昌彦	地方自治体における感情を基にした政策の必要性 ～レスポンスビリティ確保の視点から～
13	堀 和基	組織内の恩送り資金の仕組みが経営活動に与える可能性 ～ボーダレス・ジャパンの事例から～
14	堀江 信彦	地域の生活に寄り添うクルマの在り方への問題提起と提案 ～生活者へのライフストーリー・インタビューを通じて～

01



赤堀 久美子 さん

Kumiko Akabori

株式会社リコー ESG 戦略部

大学卒業後リコーでの勤務を経て、2003年 NPO 法人ジェンに転職。イラクの復興支援等を担当。2008年、再度リコーに入社し、以来、CSR・サステナビリティの推進に従事。

ソーシャルイノベーション創出につながる企業の社会貢献活動のためのフレームワーク構築
～リコーの社会貢献活動の事例を通じて～

本研究は、企業がソーシャルイノベーションを生み出す手段として、社会貢献活動の 価値を問い直し、社会価値創出につながる社会貢献活動を企画・実施・評価するための フレームワークの構築を目的とした。

先行研究、自身の実践者としての経験値、所属するリコーの成功事例、先駆的な実務家のレビューをもとに、ソーシャルイノベーションを生み出す社会貢献活動に欠かせない7つの要素を特定し、社会貢献活動を実施する際の一般的な PDCA プロセスである構想(ステップ 1)、企画(ステップ 2)、実施(ステップ 3)、評価(ステップ 4)において、7つの要素をどのように組み込んでいくかを示した。

また、リコーで実施している社会貢献活動である若者支援プログラムをフレームワークを用いて分析し、プログラムの改善点を明確にし、実践に活用できることも確認した。企業が社会貢献活動に取り組む際に、本フレームワークを活用することで、企業による社会価値の創出を後押ししたい。

02



川向 思季 さん

Shiki Kawamukai

合同会社キキ co-founder

長野県立大学 1 期生。在籍中に合同会社キキ創業。所属や立場を超え、いろんな人とのお茶から、創造(学びの場づくり) + 研究(エスノグラフィ)を通して探究しています。

大学生のマイプロジェクトを支える教育エコシステム構築における課題分析と提案
～長野県内のマイプロジェクトに取り組む大学生を対象としたインタビューからの分析～

本研究は、長野県において若者がマイ・プロジェクトを推進しやすい環境を構築するための現状課題を、当事者目線で抽出・分析し、若者を中心とした学びの環境創出に貢献する事業を提案することを目的とする。

具体的には、「わたし」を主語に生まれた想い(マイ)からプロジェクトを行う「マイ・プロジェクト」と、生徒(実践者)を中心に教育を取り巻く生物、領域、環境の相互作用である「教育エコシステム」に着目し、マイ・プロジェクトを支援する教育エコシステムについて整理する。そのために、筆者も当事者である大学生・大学院生を対象として、マイ・プロジェクトに取り組む対象者 30 人にインタビュー調査を実施し、長野県における教育エコシステムにおける分析と課題抽出を行なった。

インタビューの分析結果として、若者のマイ・プロジェクトを促進する要因の一つとして、身近な個人やコミュニティの存在と、若者を中心とした学びの支援体制の重要性が見えてきた。分析結果を受けて、コミュニティの存在と若者を中心とした学びの支援体制を強化できる仕組みとして、「暮らしから学ぶ『居住型の学びの拠点』」を事業として提案する。



工藤 創 さん

Sou Kudo

長野県庁 くらし安全・消費生活課

大学卒業後、長野県庁に入庁。障がい者支援課、内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局(出向)、地域振興課を経て現職。加えて、SI研究科でのご縁を機に『自治体の「人的資本経営」を目指す研究会』の事務局を務める。

地方自治体のパラダイムシフトと組織変革の実現に関する考察

日本では少子化による労働供給の減少、コロナ禍など VUCA 時代の到来を通じて、労働者には転職の活発化やキャリア観の変化が起き、企業では労働力確保や人的投資が重要な経営テーマとなるなど、近年、労働者と企業の関係性は大きく変化している。地方自治体も企業と同様の課題を抱えており、これからの時代に合った職員と組織のあり方へ変革すべきである。

経営資産である“ヒト”を重視する人的資本経営を参考として、地方自治体のパラダイムを転換して組織変革を実現するため、“職員”を重視する変革を実現した先進自治体のキーパーソンに対するインタビュー調査を行った。

その結果、組織規模や地域特性、首長の経歴などは異なる一方で、変革の発端である新たな首長や副首長の就任、成果志向の経営体制への変革、特例的な意思決定や業務遂行のプロセス、首長の強い意志の必要性、職員の意識変容の段階的推進などの共通点が抽出された。本稿ではこの調査結果と組織認識論を基に、地方自治体がパラダイムシフトを軸とした組織変革を実現するためのフレームワークを提示する。



江津 篤 さん

Atsushi Kozu

信州大学医学部附属病院
医療安全管理室 看護師

看護師の離職予防のための 看護管理者に求められるマネジメント ～職員満足度調査からの考察～

看護師の離職率は年々増加傾向にあり、看護の質を維持するためには看護師の確保が必要である。この研究では、看護師を対象に職員満足度調査を行い、離職の要因を明らかにするとともに、看護師の離職予防のために求められる看護管理者のマネジメントについて考察した。先行研究では職員満足度調査が目的で、結果に対する対策や実践は行われていなかった。

しかし、マグネットホスピタルでは 14 項目のマネジメント実践により離職が予防され、日本ではアメーバ経営を導入して離職率や職員満足度の改善に成功した病院もある。経営理念の明示や部門ごとの目標設定、PDCA サイクルの実践を通じて、職員に経営者意識を植え付け、リーダーシップが発揮されていた。結論として、職員満足度からは離職の明確な要因を特定することは困難であったが、看護管理者に求められるマネジメントの指標としての可能性が示唆された。組織や課題に応じたマネジメントスタイルの適切な選択が重要である。



小林 憲一 さん

Kenichi Kobayashi

株式会社十一屋 代表取締役 9 代目
(建設資材卸売)

同志社大学卒業後、鹿島建設にて 10 年間営業職を担当。2001 年 家業の事業承継のために長野に戻る。2015 年 株式会社 ELF 設立 (住宅コンサル & Cafe)

地域工務店におけるファミリービジネス事業承継プロセスの研究 ～修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) を用いた質的分析から～

本研究は、ファミリービジネスである地域工務店の事業承継プロセスに焦点を当てている。地域工務店の事業承継候補者 4 名と事業承継した経営者 5 名の計 9 名にインタビュー調査を行ない、その質的データを修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) を活用して分析した。

その分析結果を地域工務店の事業承継候補者の、入社決断に至る迄のアトツギ意識変容のプロセスと、事業変革を推進しながら事業承継する行動のプロセスに焦点を絞り、事業承継候補者の感情、両親やステークホルダーとの関係性、外的要因の観点から解析した。

その結果を結果図とストーリーラインにまとめ、地域工務店の事業承継プロセスを理解し、事業承継を円滑に行うために重要な要素として、意識変容のプロセスでは、①幼少期におけるアトツギ意識の刷込み、②早期のアトツギへの方向付け、③利他主義の精神の 3 点、行動のプロセスでは、④社外における変革の学びの場を構築し、信頼する仲間との実践を通じて、自己効力感を育成していくこと、⑤ファミリービジネスの伝統や文化、精神、関係性を大切にしながら、漸進的事业変革を目指すことの 2 点、計 5 点が重要であることを明らかにした。



三枝 大祐 さん

Daisuke Saigusa

一般財団法人塩尻市振興公社シニアマネージャー
(塩尻市より派遣出向)、株式会社のため企画共同創業者

振興公社では経営企画、スナバ、ものづくり支援、ふるさと納税等のマネジメントを担当。複業にて、塩尻の地域資源であるナイアガラぶどうを使ったビールの企画販売を行う。京都大学卒業後、大手ガラスメーカーで自動車ガラスの営業を経て、2017 年に塩尻に移住と現職。

シビック・イノベーション拠点スナバが生み出すインパクトの最大化に向けての考察 ～中間支援組織の視点から分析する地域イノベーション創出の成功要因と今後の可能性～

本研究は、長野県塩尻市にあるシビック・イノベーション拠点スナバが構築してきたナレッジや成功要因を体系化することで、新たな価値の創出と社会的インパクトの最大化を実現しうる事業提案を目的とする。そのために、スナバが生み出してきた成果やインパクトを明らかにし、それを可能にした要因を分析しながら、シビック・イノベーションが創発されるプロセスと中間支援組織に必要とされる要素を分析した。分析にあたって、内発的地域イノベーション・エコシステムの概念を先行研究として調査設計を行い、半構造的インタビューを実施した。インタビュー結果と併せて、筆者が立ち上げから現在まで運営に携わる中で得た体験知を含めた、必要要素やプロセスのモデル化を行った。

シビック・イノベーションとは「地域に住むあるいは関わる人が、生活者視点で感じた違和感や欲求を基軸に、自分自身が生きたい地域に向けて実施するアクションや、そこから生まれる持続的な事業」とスナバの運営チームが定義した言葉である。シビック・イノベーションの創発を通じて、地域課題などに取り組もうとする他地域にとって、本研究が貢献できれば幸いである。

07



塩入 美雪 さん

Miyuki Shioiri

株式会社青い銀河代表取締役、子宮頸がん予防啓発協会事務局長

長野県短期大学健康栄養科を卒業後、医療機器専門商社、楽天、外資系の製薬会社での営業を経て、2017年に医療系コンサルとして独立（～2022年）。2019年に家業である飲食店の三代目に就任し、2023年子宮頸がん予防啓発協会立ち上げ。2024年春、新たに（株）SALTを設立予定。

母親のウェルビーイング向上のための大学生向けSRHR教育プログラムの開発 ～母親へのライフストーリー・インタビューの分析結果をふまえて～

本研究は母親のウェルビーイングの向上を目指し、次世代を育成する予備軍である青年期に性と生殖の側面から親準備性を高める大学生向けのセクシャル・リプロダクティブ・ヘルス／ライツ（SRHR）教育のプログラムの開発を目的としている。日本の性教育の現状、国際セクシュアリティ教育ガイダンス、青年期向けのリプロダクティブ・ヘルス／ライツ教育の先行研究を参照しながら、未就学児を持つ母親へのライフストーリー・インタビューを通じて、母親のウェルビーイング向上に必要な要素を5つ特定した。

5つの要素のうち、大学生向けSRHR教育プログラムに盛り込む重要度が高い項目として、「自身の体の健康」「自身のキャリアとライフコースを描くこと」「出産のタイミング」の3つの要素を選定し、先行研究で学生の興味関心が低いテーマとされていた不妊・生殖医療の内容をふまえて、プロトタイプ講義を実施した。プロトタイプ講義に参加した大学生のアンケート結果をふまえて、今後SRHR教育プログラムを提供していくための実践すべきアクションを提示した。

08



関 賢一 さん

Kenichi Seki

株式会社BCF代表取締役社長（アスレティックトレーナー）

スポーツ選手の健康管理を担う専門職として活動をして、スポーツ選手のみならず、様々な世代の方々に対して、体の状態を整えるコンディショニング指導（体の状態を整えること）をサービスとして提供している。

アスレティックトレーナーの社会的地位向上に関する研究 ～新たな価値創造による活動領域の拡大をつうじて～

日本におけるアスレティックトレーナー制度が創設されてから30年が経過し、その社会的認知度や地位は低いとされる。しかし、アスレティックトレーナーの資格を基に価値あるサービスを提供し、事業を拡大している事例も存在する。本研究では、アスレティックトレーナーが運営する組織の活動や特徴、およびクライアントからの意見を分析し、その影響を探った。

調査結果からは、アスレティックトレーナーに対するクライアントの高い評価と、彼らが提供する広範な価値の認識が明らかになった。これは、スポーツ界を超えた社会的領域においてもアスレティックトレーナーの必要性が高まっていることを示している。過去の研究で指摘された社会的地位の低さとは対照的に、アスレティックトレーナーは尊敬され、社会に貢献している存在であるという結論が得られた。

この事例分析は、日本のアスレティックトレーナーの現状に新たな視点を提供するものである。今後の研究により、アスレティックトレーナーのさらなる発展に必要なプロセスの探求が期待される。

09



中尾 大介 さん

Daisuke Nakao

元株式会社八十二銀行勤務

2014年 観光まちづくり会社「WAKUWAKU やまのうち」設立

2015年（株）WAKUWAKU やまのうち及び

（株）WAKUWAKU 地域不動産マネジメント監査役

2022年6月 上記WAKUWAKU関連の役員退任、

（株）八十二銀行早期退職

善光寺門前町（旧善光寺町）における地域と老舗の課題と未来～フィールドワークによる課題整理と観光まちづくりの可能性～

長野市の善光寺周辺地域は、善光寺の門前町かつ北国街道の宿場町として「まち」が形成され発展してきた。善光寺には年間600万人の参拝客が訪れる一方で、地域の老舗は年々減少傾向にある。この主たる要因として時代の変化を背景に、事業継続上の課題や後継者不在による事業承継問題が存在する。

本研究は、地域を俯瞰し、立場や時間軸を超えて、地域に関わっていく人材の存在や役割の重要性に焦点をあて、先行事例の分析から、観光まちづくりに必要なのは、何より「地域に根付く主体者たる人（人材）」であることを明らかにしている。

そのうえで、善光寺の門前町における老舗の実情についてフィールドワークによる調査を実施し、地域に内在する課題を洗い出すことから始める。その過程で、地域の老舗をはじめとする事業者と「まち」にとって、最適な方向性を先行事例の分析結果を踏まえて模索する。本研究の課題整理をふまえ、地域と老舗の将来性についての洞察を深め、善光寺参詣を起点とし、この「まち」に人が滞在し、回遊するような観光まちづくりにつながるような方策を提案している。

10



中山 望 さん

Nozomi Nakayama

株式会社ホープ・ラボ 代表取締役社長

大学を卒業後、映像制作会社等を経てNHKに勤務。出産後は、映像ディレクターとして独立し、動画制作や講師・コンサルタントとして活動中。本大学院にて学びながら、2024年1月に（株）ホープ・ラボを設立。

出産・育児により離職した女性のリスキリングに関する研究からの事業提案

日本において人口・労働力減少が社会課題となっている。女性活躍が求められる中、政府が様々な政策・支援制度を打ち出した結果、2022年の第1子出産前後の就業率は69.5%に飛躍した。しかし、日本社会においては依然として性別役割分業の意識が強く、女性が就業と家庭の両立を行いながら能力を完全に発揮することが未だに困難である。

本研究は、就労を中断した女性が企業や組織で働く以外に、デジタル分野のリスキリングを通じて新しい働き方の可能性を探ることを目的とし、国内での女性デジタル人材育成の優良事例を調査し、共通点と課題を分析した。その結果、リスキリングの提供側に必要な4つの要素を特定することができた。さらに、リスキリング経験者の女性を対象にアンケート調査を行い、そのうち経済的自立をしている4名にインタビュー調査を行なった。その結果「自分起点の目的」、「弱いつながり」、「ピボット」、「フィードバック」の4つの重要な要素が明らかになった。

本研究の結果を踏まえ、女性に向けた新たなリスキリング事業の提案を行う。それにより女性の活躍と、日本の労働力不足問題に対処するための一助となることを期待している。



沼井 大志 さん

Taishi Numai

岡崎酒造株式会社／社長補佐

東京理科大学工学部建築学科卒業、同大学院工学研究科建築学専攻修了。凸版印刷株式会社に入社後、8年間自社物件の新築・改築をはじめとする建築に関する業務全般を担当。上田市地域おこし協力隊として、地方創生に関わりつつ、本大学院での研究をきっかけに2024年1月から岡崎酒造株式会社に入社。岡崎酒造入社後も地域の活性化に取り組んでいる。

組織における個人の関係性のなかで

クリエイティビティを発揮させる対話を用いた方法論の提案

筆者は建築の仕事に従事していた経験があり、状況が変化し続ける建築のプロジェクトにおけるメンバーたちのコミュニケーションのなかにクリエイティビティが発揮されていたのではないかと考えた。より良い結果を目指すとする時、メンバーたちが様々なアイデアを出し合い、対話的なコミュニケーションを通じて、アイデアを選択していくという営みのなかで起きていたことを明らかにできれば、他の組織においても個人の関係性のなかでクリエイティビティを発揮することができるのではないかと考えた。

そこで本研究では、組織行動論のクリエイティビティに関する先行研究と組織開発論における対話型組織開発という組織介入手法のアプリシエイティブ・インクワイリーの先行研究を理論的に整理し、組織における個人の関係性のなかでクリエイティビティを発揮させるための対話を用いた方法論について考案した。そして企業の協力を得て、その方法論の効果を実証するために、実証実験を行いその効果を確認した。その実証実験の結果を踏まえ、組織における個人の関係性のなかでクリエイティビティを発揮する対話の方法論について提案した。



拜野 昌彦 さん

Masahiko Haino

長野市役所
新産業創造推進局勤務 IT人材育成担当

地方自治体における感情を基にした政策の必要性

～レスポンスビリティ確保の視点から～

近年、行政の業務遂行や政策判断などに対する批判、とりわけインターネット上での炎上が散見される。この問題を難解にしているのは、公務員の善意による行為が民衆の感情を害していること、さらには、その対象が感情という感覚的で捉えづらいものであるという点である。

本稿では、この問題の背景を探るため、行政運営における内部要因として、公務員が自律的に行政としての責任を果たしていくべきとする「レスポンスビリティ」の概念について研究すると共に、行政外部の環境変化について「均質性から多様性」「経済性から社会性」「合理性から感情」の3つの視点から分析し、論述を行った。その上で、この問題を解決するための方策として、人への共感をベースに課題の定義から問い直す「政策デザイン」のアプローチやプロセスが有効であるとの仮説を基に、その手法について調査・研究を行った。

こうした研究を通して、行政として民衆の感情に応答していくためには、職員の感情にも配慮し、職員の感情を効果的に活用するためのしくみを整えることが必要であるという結論を得た。この結論に基づき、地方自治体における感情を基にした3つの具体的な政策を提言する。



堀 和基 さん

Kazuki Hori

株式会社旅武者／営業部

長野県立大学1期生。学部在学中にoddo coffeeを立ち上げ、大学院に進学。2024年4月より、人材系のコンサルティング会社へ就職予定。

組織内の恩送り資金の仕組みが経営活動に与える可能性

～ボーダレス・ジャパンの事例から～

“行き過ぎた資本主義”や“豊かさを感じにくい”といった声を現代社会では耳にする。本論文では、そのような社会における経営のあり方として、利他行動の一つである恩送り概念に着目をした。そこで、恩送りを経営活動における仕組みとして活用している株式会社ボーダレス・ジャパンを取り上げ、恩送り概念が経営活動に与える影響を考察した。

考察をするにあたって先行研究に基づき、恩送りは他の利他行動と比較をしてより強力な感謝と負債感及び関係性欲求を動機づけることを示した。その上で、経営理論を用い、恩送りが従業員エンゲージメントを通じ、人的資本経営に貢献する概念であることを理論的背景から論述した。

これらを踏まえ、インタビュー調査によりボーダレス・ジャパンの分析をおこない、得られた結果から恩送り概念を経営活動に落とし込むために必要な要素として「送り手が見返りを求めずに恩を送ることができること」「受け手が恩に気づくこと」「受け手と送り手が共通の目的を持っており、それぞれ自分ごと化していること」を示し、その結果から経営活動における具体的方法の提案をおこなった。



堀江 信彦 さん

Nobuhiko Horie

一般財団法人 トヨタ・モビリティ基金

トヨタ自動車にてエンジン開発を経験したのちに製品企画部門に異動し、カムリ、クラウンの企画から開発、生産、販売を牽引。SI研究科での学びをきっかけに現所属に転向し、交通事故等の移動に関わる社会課題解決に取り組む。

地域の生活に寄り添うクルマの在り方への問題提起と提案

～生活者へのライフストーリー・インタビューを通じて～

“100年に一度の大変革の時代”という言葉に表現されるように、変化し続ける社会へのクルマの対応が求められている。本稿はクルマが生活に欠かせない地域において、人の生活に寄り添うクルマの特性や価値、人とクルマの関係性を定義し直すことを目指し、これまで当たり前と考えられてきた価値基準への問題提起をしながら、今後重要視すべき価値観を提案することを目的とした。

先行研究としてアニミズム、マルチスピーシーズ人類学、社会物質性を参照しながら、「人がクルマを使う」という前提に立ち戻り、長野県在住の7名の生活者へのライフストーリー・インタビューを通じて人の生活に絡まっているクルマの特性を抽出した。この中から「クルマの生み出す車内空間が内なのか外なのか曖昧な特性を持つ」点等に着目し分析を行った。

その結果、人とクルマの関係性を見直すために、価値が生まれる時間軸や、わたしとクルマに他者を加えた「一対多」という捉え方を加えることを提案した。そして、それを現在行われている移動に関する社会課題への取り組みにどのように活かすべきか検討し指針を示した。



教員からのメッセージ

研究科長 & ゼミ担当教員から



大室 悦賀 教授
Nobuyoshi Omuro

入学直後に思考のフレームを外そうと言われ戸惑った、という声がありました。数十年かけて積み上げてきた経験や知識を取り壊さなければいけないことを考えれば、察する以上に困難で不安なことであったと思います。しかし、フレームの外し方や新たな世界を捉えられるようになり、生き生きとした皆さんを拝見していました。何より皆さんが想像していた世界より、多様な世界が存在していること、そしてそこからイノベーションが創発されることを覚えておいてください。



真野 毅 教授
Tsuyoshi Mano

2年間にわたる学びの旅はおわりました。初年度には、共に学び議論するなかで信頼の絆を紡ぎ、2年目は実務経験で得た暗黙知を形式知に変換して、未来につなげるリサーチペーパーを書き上げる。この壮大な山を目指す旅において、私もみなさまとともにベースキャンプまでの伴走者となれたことに、深い喜びと感謝の念を抱いております。みなさまのさらなる飛躍を心より祈念しております。Don't be a stranger! 卒業後も遠慮なく声をかけてください。



秋葉 芳江 教授
Yoshie Akiba

何もかもがゼロからの1期生として、新しい学びの挑戦の旅の一区切り。思い起こすのは、読んだ文献の数? 仲間との熱い議論? なにかがスパークする感覚? きっと頭の中の“智の見取り図”は2年前とは比べものにならないくらい広がっていることでしょう。旅はまだ始まったばかり、これからです。この2年間のすべてを糧に、これからをわくわくしながら切り拓いていってください。そして、語ってきたその未来をその手で実現させてください!



渡邊 さやか 講師
Sayaka Watanabe

この冊子を制作する中で、SI研究科の2年間振り返ると、皆さんが良い同志となって、様々なことを共有し、共に乗り越えつつ、いつも楽しそうにしているのが印象的に思い出されます。「Transition」のタイミングは、苦しくてしんどい。それが抜けたと実感できる時には、すでに新たなフェーズが始まっているし、新たなフェーズの終わりも見えてきていたりする時です。これから皆さんが創出され続けていくイノベーションを心から応援していますし、皆さんと共にそのイノベーションを生み出し、支え合えるコミュニティを大切に育てていきたいです。



より良い社会をつくる
ソーシャル・イノベーターを
長野から

デザイン 岡田味佳 (Fruitmachine)
編集協力 塩入美雪 (SI 研究科大学院生)
監修 渡邊さやか (SI 研究科教員)